

壮年会だより

平成24年6月度中原寺仏教壮年会だより Vol.6



さわやかな初夏の季節となり、皆様はますますご清栄のことと、お喜び申し上げます。先月20日（日）に親鸞聖人750回大遠忌法要並びに第17世住職継承法要が行われ、私たち中原寺門信徒一同は新たな出発をむかえることとなりました。

昨年3月の東日本大震災をはじめとして、考えられない事件や事故など心痛む事も多々ありますが、一同新たな気持ちになって「世のなか、安穏なれ」（親鸞聖人のお言葉）をむねに、お念仏申す日々を送ることをお誓いしましょう。

3月の行事報告 March

◆3月20日(日) 午後 1 時 【彼岸会・宿縁隴廟・永代経法要を修行】

良く晴れわたった青空のもと、宿縁廟法要に多くの参詣者が参拝され、故人を偲んで営まれました。

引き続き本堂にて彼岸法要と永代経法要が行なわれ、講演では「みやぎホスピタル理事長」宮崎幸枝先生のご法話のご縁を頂きました。

お寺に来る本来の目的はご法話を聞くご縁をいただく事であり墓参りが目的では無い、ましてそのご縁に会える人間に生まれる事がいかに難しいか、その確率をお釈迦様はガンジス川の砂の一握りより少ないとおっしゃっております。

先生はご自分の病院で医療のかたわら、定期的に法

話を開いて、患者や職員と一緒に聴聞を続けておられ、寝たきりのお年寄りや回復の見込みのない患者さんに「お浄土があってよかったね」とお念仏の話をしながらや治療に当たられているそうです。絶望的な気持ちでいる患者がしだいに救われてゆく姿を見て、教えに否定的であった看護婦さんまでもご縁にふれるよろこびを知ったそうです。南無阿弥陀仏のお念仏に出会い、条件付でどんな人でも一人残らず仏にすると誓いをたてられた阿弥陀如来の願いに、人間に生まれたからこそ本来の喜びが味わえるのでしょう。

医療現場におけるお念仏のみ教えを通し、患者さんとのふれあいの様子をを大変感動的に語られ感銘深く聞かせていただきました。



4月の行事報告 March

◆4月13日(日) 午後 1 時 臨時法座【田端先生の「歎異抄」を聞く】

学会出席のため上京された所を、平野住職が懇願して今回の講釈が実現したものです。田端先生は大阪府宇佐市で病院の院長を勤める傍ら、町の人々に「歎異抄」を長年にわたり講釈をされてきました。

今回は、「歎異抄」第一条の「弥陀の誓願不思議」と「撰取不捨の利益」の二箇所に重点を置いて講釈されました。弥陀の光（知恵）に照らされた「自分の愚かさ」を自覚し、絶対他力（弥陀の功德）の計らいで往生が成就されることが、まさに「弥陀の誓願不思議」の証左であると。その結果として「撰取不捨の利益」に預かることをいろいろな観点から説明されました。

今までの常識では、私達は極楽往生するためにお念仏

を称える。念仏を手段と考える打算があります。親鸞聖人が、「お念仏を称えようと思った瞬間に、撰取不捨の利益にあずかる」と言われるのは現生往生への強い信念と無心の念仏への憧れでしょう。「現生往生」が実現してこそ私たちは安穏な生活と還相回向が可能となるのです。これはまさに革新的な思想ではないか。

臨床医学に携わる医師として、また人間性豊かな田端先生の貴重なお話でした。



感話
シリーズ6

【愛犬「はな」の死】

16年前、我が家に一匹の子犬がやってきた。花が咲く季節、名前を「はな」と名付けた。

3人の娘たちが以前から犬を飼いたいと言っていたが、私たちには結婚してから10年程飼っていた犬を亡くした思いもありためらっていたが、それならばと家族で話し合いをした結果、犬を飼うことは命を預かること、最後まで世話をする約束で飼うことにした。

犬種はビーグル犬に決めていた。そんなある日のこと、どんなものかと皆でペットショップに出かけてみた。ケージの中には生まれて間もない子犬や子猫たちが動き回ったり、寝そべったりしていた。そして目当てのビーグル犬の前で足をとめた。

その子犬は茶目っけな、円らな目でジッと私を見つめていた。「何て可愛いんだろう」そんな私たちを見た店員が「抱いてみますか」と声を掛けてきた。その柔らかな毛並みの感触と、小さな命の温もりが手のひらに伝わり、何とも言えない愛おしさを感じた。妻は子犬を腕に抱いて「お家に来る？」と声をかけた。それまで静かにしていたその子は「うん」と返事をするように声を出した。もう決めた、この子を連れて帰ろう。

そのメス犬を「はな」と名付け、その日から我が家の一員になった。平成8年3月末のことだった。

元気に庭を駆け廻る「はな」、旺盛な食欲といたずらをしながら日に日に成長してゆく様子に、家族が集まる夜の食卓は、いつも「はな」の話題でひとつになれた。

やがて、子供たちも結婚して家を出てゆき、私と妻と「はな」との生活が続いた。仕事から帰る時間には小屋から出て待っていてくれる愛犬だった。

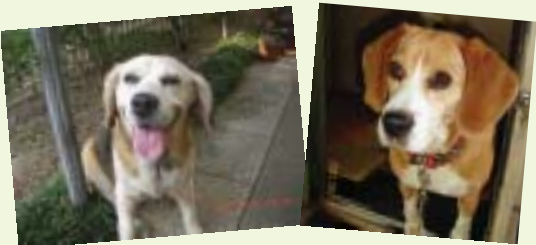
いつしか時が過ぎ、足腰が弱り次第に年老いてゆく中で病気になるようになった。

白内障、乳がん、心臓肥大になり病院通いが始まった。去年からボケの症状もでて、昼と夜が逆になり、眠れない日が続いた。妻は、自分たちがこれから来るであろうことを見ているようだねと言った。食欲も無くなり何も食べられなくなって二日目、心配して子供たちも孫を連れて会いに来てくれた。皆が帰ったその日の夜、初めて出会ったあの日と同じ、妻の胸に抱かれて静かに息をひきとった。16歳2か月の命だった。

「はな」と過ごした日々が走馬灯のように頭の中を駆け巡った。それは私たちに見せてくれた老病死の現実でもあった。

「はな」に感謝、沢山の思い出をありがとう。

(福島 道宏 記)



平成24年6月～平成24年9月壮年会行事

6月の行事

17日(日) 13時 常例法座 講師:未定
15時 壮年会法座

7月の行事

4日(水) 15時 壮年会法座
7日(土) 3時30分 ファミリーパーティー実行委員会
29日(日) 13時50分 第21回ファミリーパーティー

*お手伝いできる方は午前10時30分までにお集りください。

8月の行事

12日(日) 10時 孟蘭盆会法要
18日(土)～19(日) 第17回子ども合宿

*お手伝いできる方は午前10時までにお集りください。

9月の行事

19日(日) 13時 壮年会役員会 15時 壮年会法座
22日(土) 13時 秋季彼岸法要

編集後記 (壮年会：平成24年6月会報)

本誌も多くの皆様のご投稿により、おかげさまで充実した紙面とする事ができました。「会員の声」の原稿は常時募集していますので、ふるってご投稿くださいますようお願いいたします。

5月の行事報告 May

◆5月20日(日) 午後 1 時

【親鸞聖人七百五十回大遠忌法要並びに
中原寺第十七世住職継職慶讃法要を終えて】



今回の記念事業をもって、約半世紀にわたり中原寺
ご住職として職を全うされ、また、ご住職を支えられ
た坊守のお力も大変なものであったと思います。前住
職になられても、本願寺派の布教使としてご活躍され
ると思いますが、お身体には十分留意されますこよを
願う次第です。

中原寺第十七世住職として継職されました前副住職も、
これから大変ご苦労をされることも多いかと思いますが、
若坊守と二人三脚で頑張ってくださいと思います。

お二人を支えて中原寺を盛り立てるのも、我々門徒
一人一人の責任でもあらうかと考える次第です。

この度の記念事業に際し門信徒会役員、婦人会・壮
年会の皆さんが一致協力され、それぞれの持ち場で力
を発揮されたことも成功裏に終了したのではないかと
思います。大変ご苦労様でございました。（石井 保 記）

■記念講演：午後 3 時 青木 新門 氏

仏教は縁起を旨とし出会いを大事にします。出会い
がその後の人生を決定するきっかけとなります。私と
俳優の本木雅弘君との出会いもまさにその典型です。
私の作品「納棺夫日記」が取り持つ縁で、映画「おく
りびと」が製作され、それが晴れてアカデミー賞を受
賞したのです。

本木雅弘君という当時若干 26 歳の青年が、ベナレス
（ヒンズー教の聖地）というインド・ガンジス河での
光景（生死が隣り合わせに混在する現実）に驚嘆し、
そこでのスナップ写真の説明文として、私の「納棺夫
日記」の一節「蛆が光って見えた」を引用したいとの
電話での対話によって、本木雅弘君との縁が生まれた
との事です。



この感受性豊かな青年は、私の「納棺夫日記」を映
画化したいとの衝動に駆られました。映画化に際しては、
本木雅弘君との間に生じたいろいろな葛藤模様を微
に入り細に亘り語られ、完成までの苦労談が報告され
ました。

本木雅弘君は孤軍奮闘し周囲の関係者を説得し、や
っと映画化への第一歩としてプロジェクトチームが設
立されたそうです。そして担当プロデューサーがやっ
て来て脚本を見せて貰ったがあまりにも原作との乖離
があり原作者としては承服しがたく、作者名は匿名で
題名は変えての映画化を承諾した次第でした。

やがて「おくりびと」と言う題名で映画は完成し、
その視聴会への招待を受け上京したとのことです。映
画の出来栄えは良く私も大いに感動した。全米でも好
評を博しアカデミー賞受賞対象作品としてノミネート
されることになった。そしてアカデミー賞の栄冠を勝
ち得た。

当時アメリカでは、黒人のオバマ大統領が就任し国
民の意識や価値観の変わり目の時期でした。そんな兆
しを察知して、私はこの映画がひょっとしたらアカデ
ミー賞を取るのではないかと思ったそうです。鋭い作
家の感覚に感服いたしました。

その直後、この映画の原作者は誰かとの詮索が起こ
り私の名前が露見されることになり、一躍有名人とな
ってしまいましたが、私が「納棺夫日記」を上梓した本
当の真意は理解されなかった。

と言うのも「納棺夫日記」は単に死者の体を綺麗に
してやったとか、納棺夫の心理を描写した小説ではなく、
後世の一大事を親鸞の御教えを通じて不安を抱く衆生（愚
者）に知らしめるために書いたものであります。

然ながら、「納棺夫日記」の著作をきっかけに映画
化を縁に、本木雅弘君とも知り合い中原寺の平野住職
とも知己になり、又いろいろな人と知り合えたのは、
縁の不思議さと出会いの大事さを痛感するものである。

新しい17世住職への継職記念の法要に講演できたこ
とに感謝します。皆さん有難うございます。

中原寺 第十七世 住職継職 祝賀会



住職継職祝賀会に臨席しての所感

祝賀パーティーは、市川駅前の山崎厚生年金会館3階の大広間で厳粛な中、華やかに挙行さ
れた。来賓の方々をはじめ、門信徒の方々、中原寺婦人会、壮年会の皆さん総勢150名前後
の参列者の心からの慶祥の気持ちが溢れた思い出に残る祝賀パーティーでした。

当日の継職慶讃法要時に配布された「あえてよかったね」の冊子を紐解いて見ました。そ
こに記載された中原寺年譜に記載された前住職の履歴（昭和38年就任）を辿ると、その住職
歴が、ほぼ「東京タワー」の歴史（昭和33年末開業から現在まで任務遂行）に符合している
ことに気づかされました。奇しくも、その東京タワーが次の「東京スカイツリー」に翌々日
の平成24年5月22日に、その役割をバトンタッチされようとしているまさにその時期に、中
原寺においても新住職への継職が実現した事実は、新しい時代の幕開けを象徴するものと痛
感しました。

われわれ昭和の1桁から昭和20年終戦までの所謂「東京タワー世代」は、次なる「東京ス
カイツリー世代」へ主役の交代を自覚すべきでしょう。

東京スカイツリーの開業に合わせての17世住職の就任は、まさに時宜に叶ったものと思い
ます。先代の住職の温故を訪ね、新住職が新しい時代の知新を求めて東京スカイツリーのご
とくより高い境地を求めて中原寺の歴史切り開くように切望する次第です。おめでとう御座
います。 合掌

【東京教区仏教壮年会連盟 総会・大会に参加して】

◆5月12日(土) 午前10時

平成24年5月12日（土）に築地本願寺本堂において、
東京教区仏教壮年会連盟の総会・大会に参加してのご
報告ですが、この度の、親鸞聖人七百五十回大遠忌法
要御満座を機縁として「新たな始まり」を期する消息
のもと、平成23年度行事報告・決算・会計監査報告、
平成24年度活動方針（案）・予算（案）等を質疑応答
の中、全会一致で可決承認をされました。

午後から大会に入り

- 勘行：讃仏偈
- 仏教壮年会連盟綱領の朗読
- 東京教区仏教壮年会連盟 理事長挨拶
- 総会報告
- 仏教壮年会の歌

続いて記念法話として

1. 濱畑慧愍師

（大阪教区島上西組常見寺
衆徒・本願寺派布教師）

法話：

正定という生き方

2. 利井唯明師

（大阪教区島上西組常見寺住職・本願寺派輔教・行信教校長）

法話：本願のよびごえ



お二人の貴重な法話を聴聞し閉会式り、東京教区仏
教壮年会連盟理事長挨拶に続いて、恩徳讃を全員で唱
和して閉会となりました。（石井 保 記）